

論文の和文要旨

論文題目

「楊家将演義」小説研究
— 『北宋志伝』と『楊家府演義』を中心に —

氏名

平原真紀

中国は宋の時代に、「楊無敵」と称された楊業という武将が存在した。この楊業と一族郎党が辿った活躍と悲劇の事跡は、当時から楊家将の物語として人口に膾炙し、その後も多彩な通俗文芸に取り込まれて伝承された。明代になり、これら楊家将の説話がさまざまに収集されて長編講史小説として結実した。本論文は、この明代刊行の「楊家将演義」小説を研究対象としている。

この小説には、現存最古の板本として明代万暦年間に刊行の二系統の「楊家将演義」小説が確認されている。これらの小説は、刊行当初『北宋志伝』（『南宋志伝』との合刻により『南北宋志伝』と称する場合もある）と『楊家府演義』との書籍名であり、一部には共通プロットがあるものの、内容も結末も全く異なる書籍である。それが、どちらの作品にも楊家将の物語が記されることから、それぞれ別の時代に『楊家将演義』との書籍名でも再版された。これら二作品は現在、一括して「楊家将演義」小説と総称されている。本稿においては、史実からの伝承や楊家将物語の変容、明代の小説刊行までの成書過程、そして、近世日本を含む後世での伝播と受容について調査し、考察をおこなうものである。

本論文は、全体で七つの章から構成し、大きく三つに分かれる。まず、最初の二章では、「楊家将演義」小説に関連する史実と現存最古の板本、そして、「楊家将演義」に関連する先行研究を調査し、現状の問題点を明らかにする。次の三章では、楊一族の史実から各時代の楊家将の物語の伝播、明代に小説が刊行されるまでの成書過程と二系統の小説対比、及び、楊家将物語の変容までを取り扱う。そして、残りの二章では、二系統の明刊本「楊家将演義」小説における近世江戸期の日本への伝来と、近世日本文学の中に見る受容の可能性を調査する。この三つの構成によって、二系統の明刊本「楊家将演義」小説に関する総合的な基礎資料と成すことを、本稿における最終的な目的としている。尚、各章の要旨については、以下の通りである。

まず第一章では、「楊家将演義」小説に関連した史実と、先行研究について調査をおこなった。楊家将の事跡に関する史実と二系統の小説における虚構の差異を調査し、判明した事項を整理した。また、二系統の「楊家将演義」小説が明代の刊行に至るまでの、楊家将の事跡や伝播についても調査をおこなった。その結果、宋代に楊家将の物語が受容され伝播した背景には、二つの要素が重要な役割を果たしていたことが判明した。一つは、宋代の大都市で発展した瓦市や瓦舎という、楊業の故郷近郊から配属された兵士たちの為

の娯楽施設と、その瓦市の設立者で楊家一族を名乗る楊存中という人物との関係。もう一つには、宋代以降の識字率の大幅拡大による印刷や出版技術の発展である。この二つの要素による楊家将の物語の発展を、宋代の末期から明代に小説が刊行されるまで、通俗文芸の世界で伝播する経緯を確認することができた。更に、先行研究全般を調査し、二系統の小説を主軸とした専論に関しては、板本研究や戯劇などとの対比研究分野を除いて、未だに十分な研究成果を蓄積できていないという問題点を確認するに至った。

第二章では、二系統の明刊本「楊家将演義」小説の板本とプロットについて調査をおこなった。板本調査では、従来、『南北宋志伝』系板本における最も有力な刊行年度順である、孫楷第氏の現存諸板本のうちで最も古態を留めているのは三台館本であるとする説と、最新の板本調査と発見による説を検証し、新たな板本の刊行順序を確認した。この板本調査を踏まえ、学術翻訳書がない作品のため、板本邦訳したあらすじを対比考察の資料として提示した。その際、二系統のテキストをその詳細な内容によってプロット分類し、そのプロットごとのあらすじとして提示した。この分類によって、二系統の「楊家将演義」小説における実際の共通プロットは、同一書名であるにも関わらず非常に少ないものであるという点が改めて明白なものとなった。

第三章では、主な先行研究において様々な見解が示されている、二系統の小説における共通底本の可能性について、関連問題も共に考察をおこなった。この問題とは、①二系統の「楊家将演義」小説のどちらが先の刊行か、②二系統の「楊家将演義」小説には共通する原説話ともいべき底本が存在しているのか、③存在しているならばそれは文字化されたものなのか、という点である。①については、両板本の本文や注などの記載を確認しつつ、『北宋志伝』の刊行が『楊家府演義』に先んじているとの見解を示した。次に、二系統の「楊家将演義」小説を、文法構造と言語的特性、さらに作品構成から分析を行っている先行研究に着目し、前章のプロット分類結果を利用して共通底本についての調査をおこなった。この結果、従来、共通プロット部分だと見なされてきた箇所の中に、更なる同一性を示す部分を発見し、その部分が同一原説話である可能性が高いとの見解を示した。この発見から、②と③についても、二系統の「楊家将演義」小説は同一の説話を有する底本を使用しているものの、それぞれ別に成立したものであるとの見解を示した。

第四章においては、二系統の明刊本「楊家将演義」小説の正確な理解を妨げる、いくつかの基本問題について考察をおこなった。先行研究の分析によって判明した諸問題のうち、①主要登場人物である楊一族についての対比、②楊家を巡る登場人物についての対比、③「西夏遠征」と「十二寡婦征西」プロット内容など、混合の原因となる問題について対比し、系譜図や対比図表を制作して結果を示した。さらに、プロット対比では調査できない、挿入詩の対比考察もおこなった。この考察では、『北宋志伝』の編集者である熊大木と、『楊家将演義』の編纂者である紀振倫の編集態度の違いを、詠史詩の改筆態度からも分析し、『楊家府演義』が『北宋志伝』を非常に意識して編纂された作品である点を指摘し、『楊家府演義』編纂者の恣意的な編纂意図について言及した。

第五章では、二系統の「楊家将演義」小説の編集・編纂方法からの視点によって、更なる考察をおこなった。『北宋志伝』の編者とされる熊大木は、明代の通俗小説出版ブームの火付け役である福建・建陽の書肆であり、敏腕編集者でもあった点を勘案し、編集の特徴と編集意図について考察をおこなった。その結果、熊大木の編集方法が、できるだけ簡単な語彙を用いて、文化的素養がそれほど高くない庶民層へ、史実に基づいた注釈を付けて普通の「演義小説」より格調高い「志伝」に再編纂して販売するというものであった点を指摘した。また、この「志伝」の体裁を施すことにより、読者に対して高級感と満足感を与えて購買意欲を誘う、売れる書籍作りを第一とした編集方針であったと結論付けた。

『楊家府演義』の編纂者である紀振倫についても、南京在住の貧しい下級文人であり、生きるために小説などに手を染める者であった点も踏まえ、勧善懲悪や因果応報を旨とした編纂方法であった点や、『楊家府演義』に込めた編纂意図について、登場人物たちによる台詞の端々から、紀振倫が時の政治や拝金主義の世の中に対して抱く、憤りにも似た叫びを読み取れる点を指摘した。たとえ下層階級であっても一文人であった紀振倫が、不安定と貧困に満ちた世を憂い、腐敗し形骸化された朝廷と佞臣による陰謀が渦巻く政治の下で生きることへの嘆きを、作品の台詞の中に集約させたのではないかと結論付けた。

第六章からは、近世日本に於ける二系統の「楊家将演義」小説の伝来調査をおこなった。漢籍の日本伝来を調査するにあたり、近世日本の鎖国政策状況も勘案し、唐船持渡書類からの調査が適当であると判断した。他に、幕府や各藩、文庫などの蔵書目録類までを調査対象とした。この結果、江戸期の舶載書目や幕府書物方日記などに、二系統の「楊家将演義」小説の書籍名を確認することができた。中でも、享保年間の留牒の記述には、享保十七年に『北宋志伝』系の板本が荻生北溪所有の書籍と交換の上で、將軍の書物蔵へ入った旨を記載した文献を確認するに至った。他に、江戸期の中国白話の翻案である『通俗軍談二十一史』から『宋史軍談』という書籍に辿り着き、そこから曲亭馬琴の編訳『新編水滸画伝』編訳引書に、『南北宋志伝』の書籍名を確認することができた。この結果から、曲亭馬琴と「楊家将演義」小説について注目したところ、『椿説弓張月』の冒頭題詞十五首のうち十三首が、『南宋志伝』と『北宋志伝』からの借用であったことが判明した。更に、この『椿説弓張月』の設定やモチーフ、プロットなどに、『楊家府演義』との共通点を数多く発見した。

そこで、最後の章である第七章では、『椿説弓張月』と『楊家府演義』との関係性について更なる考察を展開した。考察にあたっては、『椿説弓張月』と『狄青演義』の関係についての論考に着目した。この論考は、『椿説弓張月』に『狄青演義』が受容されている可能性を提示しており、『狄青演義』がそもそも『楊家府演義』の派生作品であることから、『楊家府演義』にも可能性があるのではと推測し、考察をおこなった。その結果、先行研究が指摘する論拠のうち、「一代記構想」の作品であるという点だけは該当しないものの、『椿説弓張月』という作品が『楊家府演義』と同じ「家将もの」であるという新たな視点を提示した。また、他の論拠の全てが『楊家府演義』にも該当することを示し、そ

の該当箇所は『狄青演義』より多いこと、刊本の伝来時期も考慮に入れるべきであることも併せて提示した。何より、『椿説弓張月』と『楊家府演義』という二つの作品を読み比べる時、異なる時代に異なる国で筆を持つ紀振倫と曲亭馬琴が有する、それぞれの時代や作品、ひいては自身の人生に対するまなざしに、共通する熱い想いを読み取れる点からも、このような可能性も想定し得るものとして結論付けた。

以上が、本稿における「楊家将演義」小説研究の内容である。本研究において判明、発見した、「楊家将演義」小説に関する史実や明代の小説刊行までの伝承と小説の成書過程、詳細内容による対比結果、更には近世日本での伝来調査までを含む後世への伝播と受容についての調査結果は、「楊家将演義」小説の正確な理解を助ける、体系的な基礎資料を成したと言えるだろう。